

烏瓜花を解きて闇生まる
 白日傘浮き漂うて灯台へ
 晴れ間より日矢の真つ直ぐ兜虫
 黴払やはり贗作かも知れぬ
 箱庭の山河寂びるる村雨に

50

菅貫の縄の切口鋭かり
 照り降りの空明るくて昼寢覚
 果てのなき上総国原青田酔
 潮灼けの喉をしこなせ踊唄
 走り根に沿ひし蟬穴覗き見る

50

喜んで祭喧嘩を買うてやる
甚平の裏紐締めて書に溺る
灯を乞うて窓打つ夜蟬奈落めく
イエスノーどちらでもなく冬瓜汁
竈馬部首たしかめて字を探す

不意打ちの花火一瞬厄払ふ
さばさばと夏百日を籠りゐる
老い少し端居ごころも身につきし
稲の花さゆらぐ音は鈴のやう
青胡桃かの人左利きと知り

八朔や電波時計の誤差もどり
 馬のゐる片山影の大花野
 乱声の経を唱へし川施餓鬼
 柱廊を渡り一涼いただけり
 高枝のぐいと引きたる喧嘩蔓

初成りの薔紫の棘は旬
 ひとり生えせし棘の木の露けくて
 悪筆の梶の七葉を弄ぶ
 真贋はさておき蔵のお風入れ
 ポジティブな船の名前や葉月潮

意中なる仮想句敵銀河燃ゆ
奥書庫に仕舞ふ全集処暑日差し
追吹のつくつくぼふしつくつくし
管楽器店夜涼の扉閉す音
つまくれなる咲き出で際の釘付け

秋瀑の白き音色を奏じけり
掃苔の東子織田瓜家紋より
煮浸しの茄子の小鉢は盆の膳
草市で買ふ現世のものばかり
類型の絵のやさしくて走馬灯

豊秋の家木の朴を仰ぐかな
 高塔の点灯五彩秋めきぬ
 竹筒に筆の林立雨月かな
 炎帝の許創刊の陣備へ
 八十八五十年前の創刊の頃を思ひて二句の創刊立志曼珠沙華

青竹の繕ひ毀つ川床仕舞
 群萩のすがりこころを束ねられ
 調律師新涼の音を弾き出し
 白扇たたみて決まる一語かな
 八月大名てふ自肅の家籠り